



3a, 4, 7, 7a- テトラヒドロ-1H- インデンの
チャイニーズ・ハムスター培養細胞を
用いる染色体異常試験

厚生省生活衛生局 委託

財団法人 食品薬品安全センター
秦野 研究所

[目 次]

	頁
要約	1
緒言	2
材料と方法	3
1 細胞	3
2 被験物質および陽性対照物質	3
3 S9 反応液	3
4 予備試験	4
5 染色体異常試験	4
6 染色体分析	5
結果	6
特記事項	7
参考文献	7

Fig. 1

Tables 1 and 2

[要 約]

3a, 4, 7, 7a-テトラヒドロ-1*H*-インデン (THI) は、CHL/IU細胞 (チャイニーズ・ハムスター、肺) に染色体異常を誘発した。

THIでCHL/IU細胞を処理した場合、0.5%以上の分裂指数を示した最も高い濃度 (MI max) は、連続処理 (新鮮培地中で24時間処理) では0.050 mg/mlであった。また、短時間処理のS9 mix存在下 (S9反応液中で6時間処理後18時間の回復時間) では0.10 mg/ml、および非存在下 (S9反応液の代わりにMEM培地を使用) では0.050 mg/mlであった。

このことから染色体異常試験では、連続処理 (24時間および48時間処理)、短時間処理のS9 mix存在下および非存在下において、MI maxの2倍濃度である0.10 mg/ml、0.20 mg/mlおよび0.10 mg/mlをそれぞれ最高処理濃度とし、公比2で各濃度を設定した。染色体分析が可能な最高濃度は、連続処理で0.050 mg/ml、短時間処理のS9 mix存在下および非存在下においては、それぞれ0.10 mg/mlおよび0.050 mg/mlの濃度であったことから、これらの濃度を含む3濃度群を観察対象とした。

染色体分析の結果、THIにより、染色体の構造異常は短時間処理のS9 mix存在下における0.10 mg/mlの濃度において有意に増加した ($p < 0.05$)。一方、THIはいずれの処理条件においても、倍数性細胞を誘発しなかった。

[緒 言]

化学物質の遺伝毒性を評価するための短期検索法の一つとして、哺乳動物培養細胞を用いる染色体異常試験がある。化学物質によって誘発される染色体異常には、大別して構造異常（ギャップ、切断、交換）と数的異常（倍数性細胞、異数性細胞）があり、前者はDNA傷害、後者は細胞の分裂機構の異常などを反映している。本試験で用いたCHL/IU細胞は、染色体数が少なく、一般的に化学物質に対して染色体異常の検出感度が高いため、染色体異常試験によく用いられる。

OECD 既存化学物質安全性点検に係る毒性調査事業の一環として、THI の細胞遺伝学的影響を評価するため、CHL/IU 細胞を用いる染色体異常試験を実施した。なお本試験は、「新規化学物質に係る試験の方法について」（昭和 62 年 3 月 31 日、環保業第 237 号、薬発第 306 号、62 基局第 303 号）および「OECD 毒性試験ガイドライン：473」に準拠し、「化学物質 GLP 基準」（昭和 59 年 3 月 31 日、環保業第 39 号、薬発第 229 号、59 基局第 85 号、改訂昭和 63 年 11 月 18 日、環企研第 233 号、衛生第 38 号、63 基局第 823 号）に基づいて実施した。

[材料と方法]

1 細胞

CHL/IU 細胞 (JCRB 細胞バンクより入手) は、牛胎児血清 (Cansera International、ロット番号: 2605420) を 10% 含むイーグル MEM 培地 (日水製薬) を用い、CO₂ インキュベーター (5% CO₂、37℃) 内で培養した。また、解凍後継代 10 代以内で試験に用いた (親株の継代数は、1988 年 2 月に入手した時点で 4 代、現在は 12 代)。

2 被験物質および陽性対照物質

被験物質である THI (CAS No. 3048-65-5) の物理化学的性状等は Appendix 1 に示した。THI は から提供された後、室温保管し、使用のつどジメチルスルホキシド (DMSO、和光純薬工業、ロット番号: ESJ4625) に溶解して希釈した。

陽性対照物質として用いたシクロホスファミド (CPA、Sigma Chemical、ロット番号: 73H0846) およびマイトマイシン C (MC、協和醗酵工業、ロット番号: 051AEG) は、注射用蒸留水 (大塚製薬工場、ロット番号: K5H71) に溶かし、用時調製して用いた。

3 S9 反応液

S9 (キッコーマン、ロット番号: RAA-333、1995 年 9 月製造、およびロット番号: RAA-338、1995 年 12 月製造) は、7 週齢の雄 Sprague-Dawley 系ラットにフェノバルビタールと 5, 6-ベンゾフラボンを投与して肝臓から調製したものを購入し、使用時まで -80℃ で保管した。グルコース 6-リン酸 (G-6-P、Sigma Chemical)、β-ニコチンアミドアデニンジヌクレオチドリン酸 (酸化型、β-NADP⁺、オリエンタル酵母) および KCl を蒸留水に溶かし、混合液として -80℃ で保管し、使用時はこれに S9、MgCl₂ および HEPES を加え、S9 mix とした。S9 mix 存在下で短時間処理する場合、S9 mix、2 倍濃度 MEM 培地 (血清不含で S9 mix と等量) および MEM 培地 (血清不含) を混和して S9 反応液とした (5% S9、0.83 mM G-6-P、0.67 mM β-NADP⁺、0.83 mM MgCl₂、5.5 mM KCl、0.67 mM HEPES)。一方、S9 mix 非存在下で短時間処理する場合は、S9 反応液の代わりに MEM 培地を使用した。

4 予備試験

染色体異常試験に用いる被験物質の処理濃度を決定するため、被験物質の分裂指数に及ぼす影響を調べた。CHL/IU 細胞を 0.25% トリプシンを用いて単離した後、 4×10^3 個/ml の細胞懸濁液とし、その 5 ml (2×10^4 個) をガラスフラスコ (T25 cm²、池本理化) に播種して 3 日間培養した。

連続処理では、新鮮培地 5 ml と培地交換した後、被験物質調製液を 50 μ l ずつ添加し 24 時間処理した。

S9 mix 存在下における短時間処理では、S9 反応液 3 ml と培地交換した後、被験物質調製液を 30 μ l ずつ添加し 6 時間処理した。リン酸緩衝塩類溶液 (Ca²⁺ および Mg²⁺ を含む) で洗浄後、新鮮培地に交換し、さらに 18 時間培養した。一方、S9 mix 非存在下の処理群においては、S9 反応液の代わりに MEM 培地を用いた以外の操作は、S9 mix 存在下の処理群と同様に行った。

連続処理では 0.013 ~ 0.40 mg/ml、短時間処理の S9 mix 存在下および非存在下においては、それぞれ 0.013 ~ 0.40 mg/ml および 0.0031 ~ 0.10 mg/ml の濃度範囲で処理した。培養終了後、染色体標本作製した (染色体標本作製法は、後述の「染色体異常試験」と同様)。本物質はプラスチックディッシュを溶かし、揮発性が高いため、ガラスフラスコを使って試験を行い、分裂指数 (MI) を用いて細胞に対する毒性を測定した。1000 細胞あたりの分裂中期細胞数をスコアし、溶媒対照群に対する被験物質処理群の分裂指数の相対値 (%) を求めた。1 濃度あたり 2 フラスコを用いた。

5 染色体異常試験

予備試験の結果、連続および短時間処理において、処理濃度に依存して CHL/IU 細胞の分裂を抑制した。また、MI max は、連続処理では 0.050 mg/ml、短時間処理の S9 mix 存在下および非存在下においては、それぞれ 0.10 mg/ml、および 0.050 mg/ml であった (Fig 1)。

このことから染色体異常試験において、全ての処理方法で、それぞれ MI max の 2 倍濃度を最高処理濃度とし、公比 2 で 5 濃度を設定した (連続処理: 0.0063、0.013、0.025、0.050、0.10 mg/ml、S9 mix 存在下の短時間処理: 0.013、0.025、0.050、0.10、0.20 mg/ml、S9 mix 非存在下の短時間処理: 0.0063、0.013、0.025、0.050、0.10 mg/ml)。なお、連続

処理の48時間処理群の濃度は、24時間処理群と同じ濃度に設定した。

染色体異常試験においては1濃度あたり2フラスコを用い、染色体標本を作製した。試験操作は、予備試験とほぼ同様に行った。連続処理では24時間と48時間の被験物質処理群に溶媒対照群と陽性対照群および無処理対照群（新鮮培地と交換）を設け、短時間処理では、被験物質をS9 mix存在下と非存在下で6時間処理した。なお、処理群の他、溶媒対照群、陽性対照群および無処理対照群を設けた。

陽性対照群については、MCを新鮮培地5 mlに最終濃度が0.05 µg/mlとなるように添加した。またCPAをS9反応液およびMEM培地3 mlに最終濃度が5 µg/mlとなるように添加した。

培養終了の2時間前に、コルセミドを最終濃度0.1 µg/mlとなるように添加した。培養終了後、培地を除き、0.02% EDTA含有リン酸緩衝塩類溶液（Ca²⁺ および Mg²⁺ を含まない）により細胞をはがし、10 mlの遠沈管に集め遠沈した（1000～1200 rpm、5分）。上清を捨てた後、沈殿した細胞に0.075 M KCl水溶液3 mlを加え、30分間低張処理を行った。低張処理後、固定液（メタノール：氷酢酸 = 3：1 v/v）を6 ml加え遠沈した後、上清を除き、再び新鮮な固定液を加えて遠沈した。固定液の交換を数回行った後、少量の固定液で細胞を懸濁し、その少量をスライドグラス（あらかじめフロスト部分に試験系識別番号、コード番号およびスライド番号を記入）上に滴下し、そのまま風乾した。1フラスコあたり6枚のスライド標本を作製した。

3%ギムザ液（pH 6.8の1/15 Mリン酸緩衝液で希釈調製）でスライド標本を染色後、水ですすいで風乾した。試験計画番号および標本作製の日付を明示したスライドケースに、スライド標本をコード番号順に入れて保存した。

染色体分析に先立って、分裂指数により、2フラスコともに0.5%以上の分裂指数を示した最も高い濃度をMI maxとし、観察対象とする3濃度群を決定した。また、溶媒対照群と観察対象とした3濃度群については、分裂指数の分析（1濃度あたり1000細胞の観察）を、細胞毒性の指標とした。

6 染色体分析

分裂指数（Table 1、2）により、連続処理では0.050 mg/ml、短時間処理のS9 mix存在下および非存在下においては、それぞれ0.10 mg/mlおよび0.050 mg/mlがMI maxであり、

これらの濃度を含む3濃度群を観察対象とした。

染色体分析は、日本環境変異原学会、哺乳動物試験（MMS）研究会¹⁾による分類法に基づいて行った。よく広がり、かつ染色体が散逸していない分裂中期像を観察した。各群ごとに、観察細胞数、染色体型および染色分体型の構造異常の種類と数、倍数性細胞の数を記録用紙に記入した。また、異常を有する細胞は、スライド上のその位置を顕微鏡のステージの位置で表し、記録用紙に記録した。フラスコ1個から得られたスライド標本4枚を、4人の観察者がそれぞれ処理条件が分からない状態で分析した。構造異常は1群200個、倍数性細胞は1群800個の分裂中期細胞を分析した。

溶媒の背景データ（Appendix 2）と被験物質処理群間で、フィッシャーの直接確率法²⁾により、familywiseの有意水準を5%として有意差検定を実施した。直接確率法で有意差がある場合、用量依存性の有無をコ克蘭・アーミテッジの傾向性検定³⁾（ $p < 0.05$ ）により判定した。両検定でともに有意差が認められた場合を陽性とし、直接確率法でのみ有意差が認められた場合は疑陽性とした。

【結 果】

THIは連続処理および短時間処理のS9 mix非存在下において、染色体の構造異常を誘発しなかった（Table 1、2）。しかし短時間処理のS9 mix存在下において、0.10 mg/ml処理群においてのみ染色体の構造異常が有意に増加（ $p < 0.05$ ）し、傾向性検定でも有意差が認められた（ $p < 0.05$ 、Table 2）。また、倍数性細胞の数は、いずれの処理系列においても有意な増加はみられなかった（Table 1、2）。なお、短時間処理のS9 mix非存在下における0.050 mg/mlおよびS9 mix存在下における0.10 mg/mlの処理群では、細胞毒性のため、規定の細胞数を分析できなかったが、構造異常および倍数性細胞ともに規定（それぞれ100細胞と400細胞）の半数以上を分析できたため、データを判定に加えた。

一方、陽性対照物質として用いたMCは、連続処理において染色体の構造異常を誘発し（Table 1）、CPAは短時間処理のS9 mix存在下において染色体の構造異常を誘発した（Table 2）。これらの陽性対照物質の結果より、本実験系の成立が確認された。

【特記事項】

本試験の実施にあたり、試験の信頼性に悪影響を及ぼす疑いのある予期し得なかった事態および試験計画書からの逸脱は無かった。

【参考文献】

- 1) 日本環境変異原学会・哺乳動物試験分科会編:「化学物質による染色体異常アトラス」, 朝倉書店, 東京 (1988)
- 2) 吉村 功編:「毒性・薬効データの統計解析、事例研究によるアプローチ」, サイエンスティスト社, 東京 (1987)
- 3) 吉村 功, 大橋靖夫編:「毒性試験講座 14、毒性試験データの統計解析」, 地人書館, 東京 (1992)

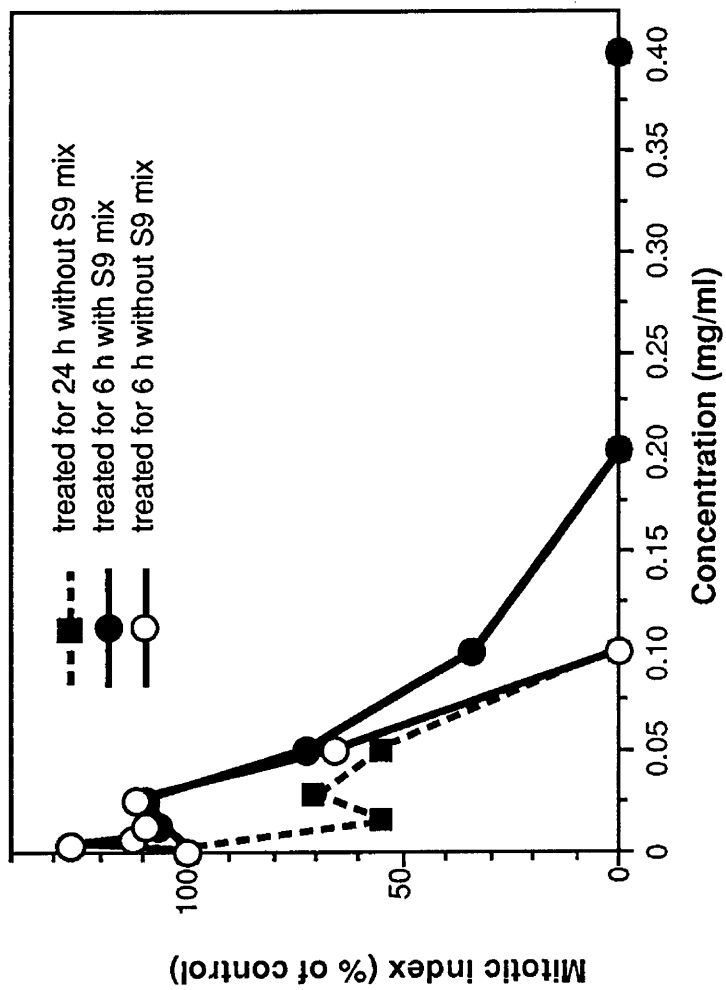


Fig. 1 Mitotic inhibition of CHL/IU cells treated with 3a, 4, 7, 7a-tetrahydro-1*H*-indene

Table 1 Chromosome analysis of Chinese hamster cells (CHL/IU) continuously treated with 3a, 4, 7, 7a-tetrahydro-1H-indene (THI)* without S9 mix

Group	Concentration (mg/ml)	Time of exposure (h)	No. of structural aberrations ²⁾									No. of cells with aberrations ³⁾		Polyloid ⁴⁾ (%)		Trend test ⁵⁾		Concurrent cytotoxicity (%)			
			analysed	gap	ctb	cte	csb	mul	total	Others	TAG (%)	TA (%)	SA	NA							
Control ¹⁾	0	24	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.13	—	—	
Solvent	0	24	200	2	0	0	0	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0.25	—	100.0	
THI	0.013	24	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.25	—	155.7	
THI	0.025	24	200	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0.38	NT	NT	116.4
THI	0.050	24	200	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0.25	—	96.7	
THI	0.10**	24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
MC	0.00005	24	200	10	42	109	3	0	0	0	164	0	96	48.0	93	46.5	0.25	—	—	—	
Solvent ¹⁾	0	48	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.38	—	100.0	
THI	0.013	48	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.13	—	146.9	
THI	0.025	48	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.25	NT	NT	124.5
THI	0.050	48	200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.25	—	167.3	
THI	0.10**	48	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
MC	0.00005	48	200	2	25	87	1	1	1	0	116	3	69	34.5	67	33.5	0.38	—	—	—	

Abbreviations, gap : chromatid gap and chromosome gap, ctb : chromatid break, cte: chromatid exchange, csb : chromosome break, cse : chromosome exchange (dicentric and ring), mul : multiple aberrations, TAG : total no. of cells with aberrations, TA : total no. of cells with aberrations except gap, SA : structural aberration, NA : numerical aberration, MC : mitomycin C, NT: not tested.

1) Dimethylsulfoxide was used as solvent. 2) More than nine aberrations in a cell were scored as 10. 3) Others, such as attenuation and premature chromosome condensation, were excluded from the no. of structural aberrations. 4) Eight hundred cells were analysed in each group. 5) Cochran - Armitage's trend test was done ($p < 0.05$) when the incidence of TAG or polyloid in the treatment groups was significantly different from historical solvent control data ($p < 0.05$) by Fisher's exact test. 6) Relative metaphase frequency to the solvent control, representing cytotoxicity, was calculated. * : Purity of test substance was 99.0 wt%. Butadiene- isoprene- piperylene (0.8 wt%) and dicyclopentadiene (0.1 wt%) were contained as impurities. ** : Chromosome analysis was not performed because there were small number of metaphases due to cytotoxicity.

